

令和3年度 3県連携復興センター合同シンポジウム

東日本大震災で育まれたレジリエンス～受け継 がれるバトン

分科会2「コミュニティ支援」～宮城県～

(一社)みやぎ連携復興センター

佐藤 研



令和3年度 3県連携復興センター合同シンポジウム 東日本大震災で育まれたレジリエンス～受け継がれるバトン 分科会2「コミュニティ支援」～宮城県～

①ハードの復興おける影響

- ・復興住宅と自立再建のスタートの違いが一体化を遅らせる
 - ・復興住宅が先行してコミュニティをつくる(集会所の使用含め)
 - ・そのときコミュニティ部署と住宅管理部署との連携は取れているか
- ・集会所の設置状況や設置場所が住民の活動拠点を左右する
 - ・エリア内のすべての住民にとっての集会所といえるか
 - ・集会所がない事例も。周辺地域との共同利用をどう導いたか
- ・安心安全な復興住宅をつくる
 - ・少子高齢化を見据えた使い勝手を予測しているか
 - ・持続的なセーフティネットを想定できるか
- ・一日でも早く恒久住宅での暮らしを願う気持ちはあった
 - ・広範囲の大規模災害時の復興～平時のロードマップの必要性
 - ・公助、共助(近助)、自助のすべてにおいての想定



令和3年度 3県連携復興センター合同シンポジウム 東日本大震災で育まれたレジリエンス～受け継がれるバトン 分科会2「コミュニティ支援」～宮城県～

②ソフト面の復興における変化

- ・仮設住宅と復興住宅のコミュニティの違いはある
 - ・みんなで前へという意識から個々が再建を果たすときに人と人のつながりがかわることを想定できたか
- ・復興住宅から公営住宅への入居要件の変化が住民力の低下につながる危惧（高齢化、動ける人がいないし入ってこない、元気な方は転出していく）
 - ・都市部の復興住宅ならば「交流人口」を増やす、周辺にコミュニティがないならば住民総参加を促す
 - ・集会所の開放（地域一帯の拠点化）、定期的に通う学生の存在（住民と一緒にまちをつくるスタンス）
 - ・班長の2か月交代、役員と班長の合同会議、会長はできないことはできないと伝える、がんばった住民には感謝をつたえることで復興住宅内での住民力を強化する事例もある
- ・地域コミュニティの担い手は初代の会長から世代交代に移りつつある、どう引き継ぐか？
 - ・もう少しシンプルな業務、役割分担、情報伝達、そしてとことん話し合う習慣（これは未来永劫必要）
 - ・全員満足は難しいが全員納得の答えは共有できるのでは？



令和3年度 3県連携復興センター合同シンポジウム 東日本大震災で育まれたレジリエンス～受け継がれるバトン 分科会2「コミュニティ支援」～宮城県～

③支援制度、支援の在り方

- ・宮城県では地域コミュニティ再生支援事業(特に補助金の直接交付)が特徴
- ・みやぎ地域復興支援助成金や各民間助成金がコミュニティづくりの主体者・支援団体の活動資金に
- ・市町単位での地元の支援団体がコミュニティ形成支援をできた
- ・県域でそれらのネットワークをつくれればよりブラッシュアップできたかも？
- ・コミュニティ形成から個々のセーフティネットまで、時にはそれらが融合して支援にまわせた
- ・補助金や助成金の計画的な使い方、地域デザインを見据えた上での活用はできたか？(交付期間終了後の活動計画づくりまでを支援するプログラムオフィサーの積極起用があったか？)
- ・地域コミュニティを「つくる」ことまでが支援というわけではない
 - ・地域運営力をつけることが持続可能な地域になっていくのではないか

令和3年度 3県連携復興センター合同シンポジウム 東日本大震災で育まれたレジリエンス～受け継がれるバトン 分科会2「コミュニティ支援」～宮城県～

④これからの地域コミュニティの支援

- ・地域コミュニティの自立自走、課題解決を主体的にできるような体制づくりの支援へ
 - ・地域のコーディネーターの発掘・育成(きく、まとめる、つなぐ、ひきつぐ)
 - ・自治会長さんにだけ頼らない、地域の中と外のどちらにもいる状態
 - ・地域の未来を描く必要、地域の誇りの発見と地域磨きのきっかけづくり
 - ・地域に仕事をふれないか？(事例調査、地域とともに自治体へ提案)
 - ・楽しそうで明るくて会話があって助け合っている地域には外からも人が集まってくる

⑤渡したいバトン

- ・広範囲の大規模災害時の復興～平時のロードマップの必要性
 - ・公助、共助&近助、自助のすべてにおいての想定
 - ・部署横断型の行政&住民の総参加で日頃から考える習慣化
 - ・地域コミュニティの復興計画は、人口減少、少子高齢化に対応できる平時の地域運営を目指すことでもある

